怖さ 骨身に染みた

福島の「3・11」

脱原発集会

東京電力福島第一原発事故により、地元・福島県の人たちはそれまでの日常から唐突に切り離されてしまった。降り注いだ放射性物質によって汚されてしまったふるさとは、一年程度では元に戻るはずはなく、その怒り、悲しみ、嘆きも継続している。脱原発集会に参加して声を上げた人、仮設住宅で祈りをささげた人…。同県郡山市内で声を拾った。

（秦淳哉、小倉貞俊）

内野席が埋まり、急きょ外野席も開放された「原発いらない！3・11福島県民大集会」＝11日、福島県郡山市で、本社ヘリ「おおづる」から

「もう飯舘で農業をやろうにもできない」

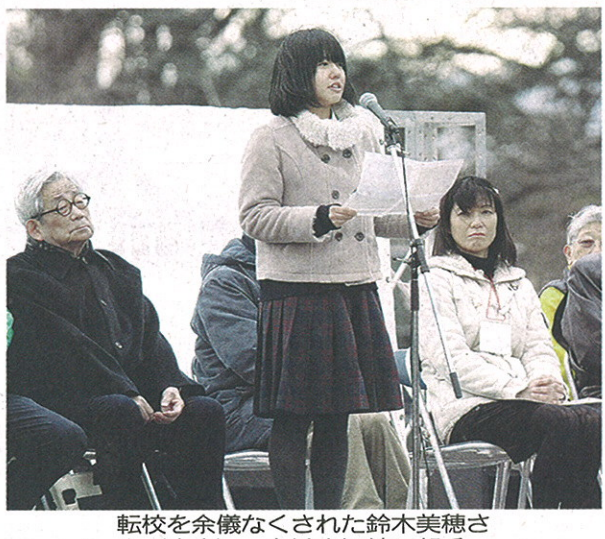
郡山市の開成山野球場に、福島市で避難生活を余儀なくされている飯舘村の農家菅野哲さん（六三）の怒りがこだました。

「避難地域では何もすることがない。農家は農業が仕事。どうやって生きればいいのか。昨年三月十五日、飯舘の放射線量は四四・七マイクロシーベルト。高放射線量のまま村民を放っていたのは誰か」

福島大の清水修二副学長や、三春町在住の作家玄侑宗久さんらが呼び掛け人になって開かれた「原発いらない！3・11福島県民大集会」。二塁ベース付近に設けられたステージから、菅野さんら原発事故の被災者六人が、集まった約一万六千人（主催者発表）を前に自らの思いをぶつけた。

「いろんなイベントに招待されたが、配慮や優しさが、かえって被災者である事実を突きつけられてつらかった。『頑張れ』の言葉も嫌いだった」

国策で悲しむのは、いつも民衆



転校を余儀なくされた鈴木美穂さん（中央）。左は大江健三郎氏

複雑な心境を語ったのは、サッカー留学していた富岡高校（富岡町）からの転校を余儀なくされた二年生の鈴木美穂さん（一七）。原発事故は「人災」と指摘。

「原発がなければ、津波や（建物の）倒壊による被害者を助けに行けた」

浪江町の橋柳子さん（七三）は、本宮市の仮設住宅に落ち着くまで九カ所の避難所を転々とした。

「第二次大戦終結後に中国大陸を徒歩で逃げた記憶がよみがえった。原発事故の避難は、徒歩が車に変わっただけ。いつの時代でも、国策で苦しみ悲しむのは罪のない民衆だと思った」

ノーベル文学賞作家の大江健三郎さんも登壇し、こう提案した。

「原発事故を絶対に起こさせないことはできるのかと問われれば、間違いなく『できる』。この国の原発全てを廃止すればいい。放射線の影響を受けることは絶対にない」

会場には、福島県外からも、原発問題に関心を持つ人たちが大勢駆けつけた。

千葉県流山市の梶間恒夫さん（五九）は線量計を持参。この日、球場外で測った空間線量は一・一三マイクロシーベルトだった。

「流山もホットスポットが多い地域だが、郡山の線量も高い。直接被害を受けないと原発問題を考えない人も多い。今回の集会がきっかけになれば」

東京都豊島区の僧侶石橋行受さん（六三）は、全国の原発を歩いて巡る途中で、この日に合わせて郡山を訪れたという。

「原発の恐ろしさは骨身に染みた。原発エネルギーから転換しないと、人類に未来はないと思う」

集会後、参加者は「安心して暮らせる福島を取り戻そう」などと書いた横断幕を手に、市内を二手に分かれてデモ行進し脱原発を訴えた。

番組表の記号の見方

②２カ国語放送　多音声多重放送　SS臨場感のある高音質

世界まる
金沢・K
時間を拡
各地の番組
ペシャル編
長課長、ト
中川家ほか
は、コント
のスポーツ
アフリカ・
から、おり
チンパンジ
った事件を
ュメンタリ
トルコから
レビ事情を
HEY
石川・B
アーティ
福山雅治が

悩み深まるばかり

仮設住宅

失った日常 心が泣いてる

じいちゃん…悔しくて苦しくて

郡山市にある仮設住宅。今も60人近くの双葉町民が身を寄せている

開成山野球場から数キロ、同市喜久田町の仮設住宅では、双葉町民が節目の一日を静かに過ごしていた。

双葉町は事故直後から警戒区域に指定されており、この仮設住宅には現在、三十一世帯五十七人が暮らす。

午前十時、敷地を見回っていたのは仮設住宅の自治会役員を務める細沢靖さん(六七)。午後には集会所に献花台を設け、ささやかな追悼会を開くことになっていたが、駐車場に残る車はわずか数台だった。

「今日は県内各地でも催事があるためか、若い世代は出かけている。残っているのは、お年寄りのいる世帯が多いね」

原発近くで食堂を営んでいた細沢さん。震災当日は食材の買い出しで外出しており、海岸近くで地震に遭遇した。

「辛くも津波から逃れたが、所有する漁船は流された。避難が数日遅れたので、十二日の(1号機)原子炉建屋の爆発も見た」

避難所を転々とし、九月からこの仮設住宅に一人で住んでいる。

「部屋が狭いのは仕方がないが、海の近い故郷と違って雪も降るし寒い。日々、何の楽しみもない。一時帰宅で戻った自宅は無傷のまま。放射能さえなければ、全く普通に住めるのに…」

福島第一原発5、6号機が立地する双葉町は交付金で潤ってきた。自身も二十五年間、作業員として働いてきた。

「お世話になったという感謝より、国や東電のずさんな対応への怒りとあきれが上回った。もう原発は要らない。脱原発の集会やデモには加わらないけれど、気持ちでは応援しているよ」

午後になると、集会所に人が集まり始めた。高齢者を中心に二十人余りが地震発生時刻の午後二時四十六分に黙とう。

涙を拭っていたのは、独り暮らしの新田絹枝さん(七七)だ。昨年五月末、避難先で体調を崩した夫の茂さん=当時(八〇)=を亡くした。会社を経営していた茂さんは、震災の直前にようやく一線を退いたばかりだった。

「これからゆっくり、二人で旅行でも、と楽しみにしていた矢先だった。悔しくて苦しくて、何も手に付かず、ずっと引きこもっていた。いっそ『じいちゃんと一緒に逝っていれば』とまで思ったけど、今日だけは節目だから。また明日からはつらい日々です」

仮設住宅の集会所に設置された献花台に花を供え、手を合わせる避難者

大谷陽子さん(六三)は、この時期、いつも何をしていたかとよく考える。

「『イモの作付けをしていたな』とか『もう畑の草むしりもできない』とか。かけがえのない日常を失ってしまい、寂しい。何とか奮い立たせていかないと、心が泣いてしまうんです」

細沢さんによると、町の将来が見通せないことで、住民の間にさざ波が立っているという。

「高い放射線量もあり、子どものいる若い世代が戻るつもりがないのは仕方ない。ただ、年寄りはみな『戻れるなら戻りたい』と思っている。住民の気持ちはバラバラ。解決に向かうどころか、悩みを深めるだけの一年だった」

地元で農業をしていた

デスクメモ

「こんな目に遭わせた東電は許せないが、いずれ怒っているのは福島県民だけ、なんてことにならないか」。電話の向こうで、双葉町から避難中の男性がこんな心配を口にしていた。節目の日、東京電力からは何の音さたもなかったという。その怒りにも悲しみにも、引き続き寄り添っていきます。(木)

本音のコラム

災害弱者

宮子(みやこ) あずさ

東日本大震災当日、私は母の受診に付き添い、そのまま母の家で過ごした。あれから一年。母は膠原病(こうげんびょう)の治療のため入院している。感染などの危機を乗り越え、ようやく退院が見えてきた。

入院前は在宅酸素をしながら自力で生活していた母だが、長期臥床(がしょう)で動きは悪くなった。リハビリでの改善は見込めるものの、今後しばらくは誰かの支援が必要である。

この状態で地震が来たら、いよいよ何もできない。例えば、一人の時に酸素が止まれば、命に直結する。幸い母の住む東京・杉並では災害弱者の登録が進められているが、こうした人が地域に増えれば、迅速な対応は至難の業だろう。登録には感謝しつつも、それに多くを期待していない。

その理由の一番は、ここまで十分生かしてもらった、そう思うからである。いくつも重い病気を体験した母はどれだけ多くの人に助けてもらったことか。母も生きたいと望み、私も生きてほしいと願う。しかし、平時なら生きられても、修羅場になれば難しい。ここは覚悟するしかない。

そして、私自身も、その時、母を最優先に動けるとは限らない。たとえ行政に対してでも、自分にできないことを他人に求めるなら、寛容と感謝の心を持ちたい。さもないと、足ることを忘れ、苦しくなるだろう。

そして、このわきまえは元気な時の母の美学でもある。(看護師)

話題の発掘

松瀬学のスポーツ時評

ラグビー釜石SW

前へ、一歩ずつ

悲しくつらく、重い試練が続く。だからこそ、つづくづく思うのである。

「前へ、一歩ずつ」と。

あの日からちょうど一年がたった日曜日。東京都内で開かれた震災イベントの会場に、被災地・釜石市のラグビーチーム、釜石シーウェイブス(SW)の高橋善幸ゼネラルマネジャーの姿があった。「震災はまだ、終わっていません。最後まであきらめず、市民と一緒に一歩ずつ、前に進んでいきたい」。かねてそう繰り返している高橋さんにとって特別な一日だったろう。

この一年、何度、釜石を訪ねたことか。震災の一週間後に飛んで行った時、釜石SWの選手たちはボランティア活動に取り組んでいた。桜の咲き誇る五月、街の人々に背中を押される格好で、やっと練習を再開した。

釜石SWは市民とともに生きている、と感じたものだ。V7の新日鉄釜石ラグビー部の流れをくむ釜石SWは地域密着のクラブと形を変え、十年に膨れ上がった。新規がラブチームのありようが問われた一年だった。

「復興の光」になろうと、選手たちは奮闘努力した。トップイーストリーグでは四位に終わり、トップリーグ(TL)昇格は成らなかった。佐伯悠主将は言った。「ガムシャラにやった一年だった。でも、もっと自覚と覚悟が必要なのです」と。

それでも、釜石の人々の生きる力には貢献したはずだ。むろん、現実は厳しく、仮設住宅のつらい生活が続き、自ら命を絶つ人もいる。が、釜石SWが何人かの命は救った。そう信じたい。

例年、二千人前後で推移していた釜石SWのサポーター数は三千五百人余がたった。震災で、クラブチームのありようが危うかったクラブの経済状況も好転した。

外国人選手の入れ替えなどの戦力補強が成され、来季、再びTL昇格に挑戦することになる。いろんな意味で、本当の勝負の年となる。

釜石は、二〇一六年岩手国体のラグビー会場となる予定だ。さらには一九年ワールドカップ日本大会の試合招致も目指している。新たな競技場建設の構想もある。目標があれば、人は生きることができるのだ。

高橋さんは、「前へ」をモットーとした明大・北島忠治監督(故人)のまな弟子である。「前へ」とは、逃げるな、あきらめるな、と同義でもあろう。

高橋さんは、市民をFWに、釜石SWをFW第一列に例えた。「スクラムで後ろの押しを前に伝えるため、まず姿勢を崩さないようにしないといけない。ぶれないよう、しっかりした姿勢で」と。

釜石SWの挑戦を、東北の復興を見届けよう。いや応援しよう。共に前へ、進むために。

(ノンフィクション作家)

ラジオ

MROラジオ 1107 1485

5.00 あさ◇宗教◇20人間
30 生島ヒロシの一直線
6.30 買物◇自然◇歌謡曲
7.00 げつきんワイド！おいね・どいね

KNBラジオ 738

5.00 宗教◇竹川◇20人間
30 生島ヒロシの一直線
6.30 宗教◇自然◇45１曲
50 とれたてワイド朝生 陸田陽子　木下一哉

FM石川 80.5 85.5 78.4 89.9 81.9

4.00 リビング・M
5.00 音楽自由区。
30 オンザジャーナル
6.00 中西哲生のクロノス
7.30 ＯＨ！ハッピーモー

FMとやま 82.7

5.00 音楽自由区。
30 オンザジャーナル
6.00 中西哲生のクロノス
7.00 ウエーク◇トレンド
30 イン・ザ・モーニン

BS

番組は放送局の都合により変更される場合があります。